広島市立広島特別支援学校

令和2年6月12日発行

サポート通信 VOL. 25

特別支援教育センター校からの情報発信ネットワーク

発行者　広島市立広島特別支援学校地域支援部 広島市南区出島４丁目１－１TEL 代表 (082)250-7101

豊かな生活(くらし)を求めて

広島市立広島特別支援学校校長　中尾　秀行

サポート通信を御拝読いただき、ありがとうございます。令和２年度も２か月が過ぎ、梅雨の季節を迎えます。コロナウイルス感染拡大防止による学校の臨時休業が長く続き、やっと完全登校ができる状況となりました。一人一人や、皆でできる感染拡大防止に継続して取り組んでいきたいと思います。

臨時休業中、ものすごく気になっていたことがあります。子どもたちの家庭での生活です。本校の子どもたち５４１名が、それぞれの家庭で豊かな生活（くらし）ができているかということです。子どもたちはどのように家庭で過ごしているのか、保護者のお気持ちはどうなのか電話等で受け止めていくことが大切です。不安な気持ちは、学校が再開しても続きます。感染のリスクはあるし、子どもが学校に友達に馴染んでいくだろうかと心配です。今年３月半ば、本校の高等部第１学年の生徒と話をしました。「卒業したらどうするの？」「仕事をしたいんだ。」「どうして仕事をするの？」「仕事をして給料をもらいたい。」「その給料は何に使うの？」「お父さん、お母さんのために使いたい。」「どうして？」「これまで、お父さん、お母さんに一杯心配を掛けてきたから、恩を返したいんだ。」生徒の成長に感動した瞬間でした。私たちは、この通常ではない事態を理解し、カウンセリングマインドで子どもたちや保護者に向かい合いたいものです。

本校のサポートセンターにもたくさんの相談が入ってきます。昨年度、延べ 971 件もの相談がありました。毎年増え続けています。４月から相談員を１名増員していただきました。増加する相談への抜本的解決には程遠いと感じています。相談内容を見ると、通常の学級の子どもについての相談が 80%を越えます。特別支援学級の子どもについての相談が最近増加しています。中学校の子どもについての相談も増加傾向にあります。

サポートセンターに行けば、悩みが解決するというものではありません。子どもたち、保護者の悩みや困りごとは、普段の生活（くらし)、学校生活で起きているのです。

解決策は、そこにあるのです。サポートセンターに相談に来られた保護者に子ども理解、支援方法等を伝えても、学校での生活にも生かされないと全く無意味なものになってしまいます。学校は子どもと保護者とのトライアングルの関係が必要だということです。いい音色の出るトライアングルにするための一助をサポートセンターが担っているのです。

教育相談

サポートセンターについて

南区出島　広島市立広島特別支援学校　3階にあります！

サポートセンターは、広島市立の幼稚園、小・中学校、高等学校に在籍している幼児児童生徒と保護者、教職員を対象に、以下のような支援を提供させていただきます。

保護者・本人への支援（保護者からのお申込み）

保護者と本人がサポートセンターへ来校する相談です。子どもの特性や学び方の特徴を把握・整理し、保護者や本人に具体的な支援や学習方法についてアドバイスします。担任の先生方とも連携を図り、情報交換を行います。

学校への支援（先生方からのお申し込み）

特別な教育的ニーズのある子どもたちの特性の理解や支援の在り方等について情報提供をします。「巡回相談」と「来校相談」があり、「巡回相談」では、実際に授業場面を参観し、子どもの特性に応じた対応や教材等を紹介しています。申し込み様式は、本校ホームページ上のサポートセンターのページに掲載してあります。

今年度サポートセンターで相談を担当するのは、北村（きたむら）、間賀田（まがた）、永井（ながい）、田渕（たぶち）の４名です。
先生方との連携を大切にしながら相談を進めていきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

広島特別支援学校サポートセンター　　直通TEL　２５６－２３１０　学校代表TEL　２５０－７１０１

情報

子どもたちの課題の取り組み方　工夫あれこれ

保護者に情報提供したパンフレットから抜粋しました（本校 HP に掲載しています）

子どもたちが自宅で学習する機会が増えました。子どもたちはどんな風に家庭学習に取り組んでいるでしょうか。紙と鉛筆での勉強とは相性の良くない子どもの場合、人知れず苦労していることがあります。気になる子どもには、課題の内容だけではなく、「どのように取り組むか」までのアドバイスが必要です。一人一人に合った学び方を一緒に見つけ、学びが途切れさせないようにしたいものです。気になる子どもの保護者とは気軽に相談できるようにしておきたいですね。

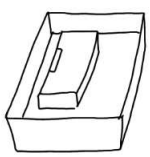
できそうなルール・環境をつくり やる気を引き出す

やる気の正体とは…
「やる気が出るからやり始める」のではなく、
「やり始めると徐々にやる気が出る」のです！
「鉛筆を持ったね」「ノートを開いたね」など、小分けに褒める技でやる気をつないでいきましょう！

・　短くても机につくことを習慣に
　「１０分だけ座ってみよう！」
　静かで気になるものがない場所で

かべに向かって机を配置

・　学習に関する用具がそろっていると
さっと取り掛かかることができる！



学習用具はセットしておく

取組　iPad と Zoom を利用した交流タイム

本校　高等部職業コースの取組　～双方向の交流の楽しさを味わう～

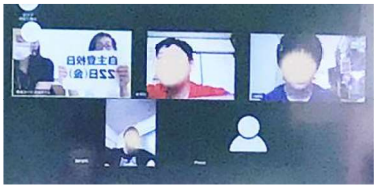
臨時休業中、本校高等部職業コースでは上記の取組を行いました。まずは、操作方法やルールの確認をしました。

＜ルール＞
① 録音、録画はしない。ＳＮＳなどに公開しない。
② その場を離れる時はビデオをＯＦＦ。
③ 参加の方法は選択可。（声のみの参加でも OK。）

＜教師が工夫していたこと＞
○ 注意を引きつけるよう、生徒の名前を呼んで（名前カードを示しながら）質問。
○ 伝達事項は視覚的に提示。（ホワイトボードや大きく書いた書面を用意）
○ 正しく操作できているときには適宜フィードバック。

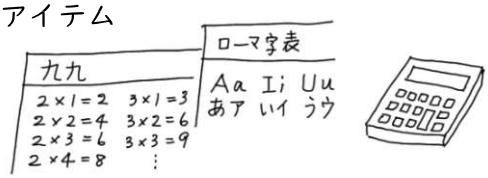
「交流タイム」では生徒の心身の健康状態、家庭での学習や生活状況の把握、生徒と教師・生徒相互の交流を目的として、就寝時刻や起床時刻、休業中に取り組んでいることや家での手伝いなどを交流し合いました。どの学年でもお互いに伝わりやすいように「ＹＥＳ。」・「いいね。」のときはＯＫサインで答えるようにしていました。また、もっと分かりやすいように「音声の状態が悪いから書いて見せて！」「習字の作品見せて！」等の言葉も聞かれました。そして、相手へのリアクションとして相槌を打ったり、「なるほどー。」「それ知ってる。」「あー、それ全巻読んだよ。」と言葉掛けしたり、質問に対する教師の回答に「〇〇さん、解決？」と友達の様子を気に掛けたりする普段の様子も垣間見られました。今後の予定が示されると、自ら必要なことをメモする姿も見られました。今後ＩＣＴ機器を使う中で、自分に合った記録の取り方を見つけることにつなげていけそうです。

この取組で、画面越しに学校生活と同じような双方向のやり取りが実現しました。顔を見合わせた交流では、電話やメールとは違って表情や雰囲気が読み取れ、言葉に表れないことも分かります。また、双方向のやり取りでは、積極的に発言したり質問したりでき、活気が出ます。生徒は他者から評価や称賛を受けることもでき、自分の生活への気付きを得られる機会になったと感じました。

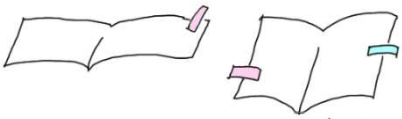


ヒントのある状態で取り組む

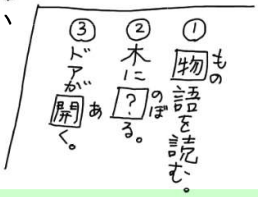
・ 参考となる教科書や資料を常備しておく
平仮名・カタカナ表、九九表、電卓、電子辞書などのアイテム



・ 教科書や参考書に付箋を貼っておく



・ 資料を見てもわからないところには「？」と書いておくことを教える。



次につながるようにする

・ できるだけその日のうちにやスタンプやシール、コメントを入れるなど、がんばったことを認め、伝わる工夫をしましょう。

・ やった課題や手伝いの様子、予定ボードなどを写真に撮って残してみましょう。「Photo memes」（有料）というカレンダーアプリで学習の足跡が簡単に残せます。

・ 予定したことが終わらなかったときは、次の日の予定を子どもに合う量にしてみましょう。

・ ICT 機器による読み上げや入力を許可し、課題の目的に迫れるようにしましょう。

書評

「特別支援教育ですぐに役立つ！ICT活用法」

佐藤里美 監修　Gakken　定価 1，800 円（税別）

新型コロナウイルス感染症対策による学校の臨時休業に伴い、遠隔授業が話題になっています。これまで遠隔授業の実践は大学教育が主流でしたが、小、中学校や高等学校、そして特別支援学校でも実践が増えつつあります。この本ではこれまでも行われてきた特別支援学級や特別支援学校でのICT の活用実践について取り扱っています。タブレット端末による読み書き指導等だけでなく、遠隔授業に関する項目も紹介されています。

知的障害特別支援学校の女子生徒のケースでは、教師が『iBook Author』というアプリを用いて、作業手順を教材化し、生徒のタブレット端末に取り込ませる支援を行いました。自宅で作業手順を確認できるようになったことで普段の学校生活でも自信を持ち取り組めました。自己肯定感が低い面もあったため、自宅で頑張る様子を写真撮影し、友達の前で見てもらう支援も行いました。周りからの評価を受け、自分から積極的に友達に関わるようになったとのことです。

病弱特別支援学校で集団生活への不安傾向が強く、不登校になった男子生徒のケースでは、『FaceTime』により週１回学校と接続し、集団活動の授業に参加しました。当初は時間も短く、一方的に話してしまうことが多かった生徒でしたが、相互のやり取りが行えるようになり、各教科の授業も個別で遠隔授業を受けられるようになってきました。

これからは“一人１台端末”の時代となるでしょう。教員にも ICT に関する専門性だけでなく、これまでにない新しい形態での教育活動について、柔軟に対応することが求められるようになります。

お知らせ

例年夏季休業中に実施していた教育相談会ならびにサポートセンター研修会は、今年度は開催を見送らせていただきます。申し訳ございません。

編集後記

今までにない長い臨時休業期間中、先生方は児童生徒の健康状態や宿題の取組状況の把握など、試行錯誤しながら当たられていたことと思います。

本号は、新型コロナウイル感染拡大の中注目された ICT 機器を使ったオンラインでの取組や家庭学習をテーマにお届けしました。この状況の中、オンラインで子どもと教師、子どもと子どもがつながる取組、学びをつなげる新たな取組があちらこちらで始まりました。広島市でも児童生徒への端末の整備が始まり、学校での今後の活用に期待が高まっています。オンラインでの交流は「顔を見て話せる。」「距離を超えてつながることができる。」という良さがあり、学校生活の普段のやり取りが実現するのと同時に、教室とは違う環境の中で子どもの意外な一面が見られるかもしれません。思うように外出できない中での友達との交流は、子どもたちにとって気持ちを高める機会にもなったのではないでしょうか。